

2024年5月31日

音楽科

野口 誠司

ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任

2023年度の担当科目一覧表

科目区分 (教養/専門/教職)	科目名	種別 (必修/選択)	開講時期	受講者数
専門	ピアノ指導法	選択	2年前期	5名
専門	合奏	選択	2年前期	14名
専門	音楽理論	選択	1年前期	5名
専門	音楽キャリア1	選択	1年後期	3名
専門	伴奏法	選択	1年後期	7名
専門	ステージ実習1	選択	1年後期	21名
専門	専修実技1~4(ピアノ)	必修	前後期	5名
専門	ピアノA,B	選択	専攻科前後期	1名
専門	音楽実習	必修	専攻科通年	3名
専門	演奏会研究	必修	専攻科後期	3名

*科目区分:「教養」、「専門」、「教職」の3つから指定すること。

*種別:「必修」、「選択」の2つから指定すること。なお、選択必修は「選択」とする。

2. 教育の理念

音楽は、生きる上で重要な役割を果たしていると考えている。言葉で理解するのではなく、心に直接感じることができるものが音楽であり、生きるための刺激であり活力と考えている。美術に構成やモチーフ、テーマが存在するように、音楽にも同じものがある。美を感じるためには、知識を含む教養や美しいと感じる感覚が必要である。音楽の場合、受け取る側にもある程度の知識は必要であるが、聞くことにより感じ取ることは可能である。また、演奏技術を見ることは楽しみでもある。それに対し、提示(演奏)する側にとっては、音楽を理解していなければ表現できないし、何も無ければ演奏しても無意味である。何も考えられなければ、機械による演奏と大して変わらない。1つ違うのは、人が努力して演奏しているという緊張感のみである。演奏する際に必要な事は、和声・リズム・フレーズ・形式・時代背景・楽器の特性・演奏技術(音色を含む)など数多くあり、書き出すとキリがない。それらを知識として知り、技術として習得し、表現として再現できる力が必要である。この能力は社会生活を送るためにも役に立つ。目の前にある事に対する直感、分析、改善、再構築する回路である。また、社会人として活躍の場として、表現(芸術)活動や指導(講師等)能力が考えられるが、コミュニケーション力は大変重要である。そのため、学生が自ら考え、自ら方向を導き出し、努力・成長できるよう、課題や口頭による問いかけを多く行い、言葉での発信、表現ができるよう指導を行っている。

3. 教育の方法

①講義では、個人へ出した課題を発表という形式で行い、それに対しフィードバックを行うよ

うにしている。個に対し指導を行うが、全体もそれを知ることにより、自らへ還元できるようにしている。また、伴奏法ではルーブリックを使用し具体的内容を示すことにより、学生の学びの方向性を示している。

- ②レッスンでは、教員側からの道筋はなるべく示さないようにしている。自ら考えさせ、演奏したことに対し、言葉でフィードバックを行っている。それでも表現できないときは、楽譜の分析方法を示し、模範演奏、模範技術を示し、学生自身が感覚的に納得できるようレッスンを行っている。学生の理解力は様々であるため、学生の能力に合わせた言葉や方法を選択している。音楽は言葉で表せない感覚的なことが重要であるため、真似が一番大切である。しかしその能力の低い学生には、前段階の言葉での説明に時間を費やすことも多い。ある学生は、楽譜通りに演奏することを知らない。そのため、初心者同様基本を説明し、楽譜通りに演奏させることを最初に行う。演奏技術はある程度あるので、そこを乗り切れば、大学生に対するレッスンを行うことができる。
- ③この2年に、顔に表情が乏しい、話しても反応が薄い、話すことが難しいなど②の指導法では対応できない学生も存在する。それらの学生には、子供の指導同様に弾いて聞かせることにより、音楽の熱を伝える事ができる。すぐに真似できる学生、できない学生と様々であるが、その状況を見て、真似できない学生には、具体的な指示を与えることにした。例えば、指を上げる理由、打鍵のスピードによる音色の変化などを、1つ1つ解説しながら進める事とした。その他、弾きながら話しても聞き取れない学生もいた。その学生には、模範演奏と話を分けてレッスンすることとした。さらに、何度注意しても訂正できない学生がいた。雑談により話を聞くと、ADHDには属さないがそれにほぼ近い（医者から）学生であった。雑談によりその事が判明したため、指導法を変える事とした。

4. 教育の成果

- ①授業の成果は、レポートや発表である。「伴奏法」においては、ピアノが専門ではない管楽器の学生を担当している。この学生達にピアノ演奏能力を求めても意味が無い。技術習得には時間を要するためである。そのため、「伴奏とは」という意味付け、ピアノの役割、ピアノ伴奏を弾かせることにより、自分の楽器へと還元できるようにしている。目標技術を下げることにより、内容の習得ができる。発表では、全員演奏することが出来ているため成果が出ていると考えている。教職履修者にとってピアノ演奏は必須である。その学生には、技術を多く学ばせている。また、口頭発表が多い「音楽キャリア1」では、事前に練習させることにより、発表の完成度を目指している。最終授業で、外部講師の前で発表させているが、外部講師から問題の指摘は無く、成果は出ている。「合奏」では、専修実技の技術を持っている学生が受講するため、良い演奏が出来ている。「ピアノ指導法」では、経験上良い発表を行っているが、なぜそのようにすべきかの説明が出来ない。多くの知識を与え、調べさせることにより、学生自身に気づかせるようにしている。ステージ実習1は演奏をするための裏方の仕事や曲目解説の書き方、宛名シールの作成など必要な作業を学ばせている。アンケートでは大変有意義であったと感想が述べられており学習成果が出ている。
- ②実技レッスンの成果は、すべて演奏結果である。期末試験でどのような演奏になったかのかが重要な証拠となる。緊張で普段の演奏とはかけ離れた学生、演奏はできたが内容の薄い学生など、その内容により学生がどの程度、技術や演奏能力を身に付けたか評価し次回へと導いている。尚、どの程度という評価は、個人教員の評価であり数値化は難しい。演奏結果としては表情豊かな演奏だったため良い勉強ができたと考えている。
- ③専攻科はゼミ形式で実施している。各学生に対し必要なことを指導できている。

5. 今後の目標

- ①授業においては、学生の学びをスムーズに行うため前時間の復習を行い、新しい課題へと結び付けることを継続する。
- ②レッスンにおいては、学生の能力により指導法や結果が変わってくる。すべての学生が、納得できるレッスンを心掛け、表現力や技術力が良くなった時はその事を学生に伝え、さらなるチャレンジを求めたい。2年生には学外演奏の機会を与え、表現力を深めさせたい。
- ③教職を希望する学生にはピアノ演奏力が求められる。「伴奏法」での練習量や練習方法を指導しながら課題のフィードバックを行い、学生に努力を求めたい。
- ④ピアノ指導法においては、講師として活躍するためには多くの知識が必要とされる。学生は技術が向上するための練習に多くの時間を費やしている。学生が将来自ら向上できるよう、様々な知識を示し考えさせることにより授業を実施する。
- ⑤個人の性格の幅が大きくなっている。他の学生が出来るからこの学生も出来るだろう、という事は通用しなくなった。個人の性格と能力を判断し、個に合わせた指導を努力する。また、様子がおかしい学生は、雑談の時間を設け、支援が必要な学生なのかどうかを探る。

根拠資料

- シラバス
- 授業評価アンケート結果
- 授業改善計画書
- 授業メモ
- レッスンノート